

岸信介のDNAをもつと磨け

靖国、憲法・教基法改正などの重要課題で、保守の精神を忘れたら政権は短命に終わる

特集 安倍政権にカツを入れる!



ひらぬまたけ お

平沼赳夫

衆議院議員



さくらい

櫻井よしこ

ジャーナリスト



まつばら じん

松原 仁

衆議院議員



えんどう こういち

遠藤浩一

評論家・拓殖大学客員教授



平沼 予想どおり、自民党の総裁選挙は安倍さんの圧勝に終わ

りましたが、党外から見えていて、憲法観や対中国政策において、安倍さんとは正反対の立場の人が真っ先に安倍支持を鮮明にするなど、総裁選の初めからじつに大勢の人が安倍さんの周りにすり寄っていったことには驚きましたね。

松原 今回の総裁選では、安倍さんが勝ち馬だという流れが世論をふくめ前段階からありましたからね。自民党内の巷間「媚中派」と言われている二階俊博さんのような重要閣僚や有力者までが安倍さんを推しました。私は「中国や韓国に対してはつきり物を言っていこう」とする安倍さんの外交スタンスに関しては、野党議員であっても個人的に共鳴する部分がありますが、これだけさまざまな思惑の人々の支持の上に政権が成立してしまうと、どこまで「安倍色」を打ち出せるかどうか、疑問に思います。

平沼 ヘンな形の挙党体制になってしまっていますからね。小

泉さんのときは孤立も恐れずというマイペースでしたが、そうもいかなくなるでしょう。

松原 ええ、安倍さんの真の敵は党内にあっては麻生・谷垣という二候補ではなく、「前小泉政権」です。よくも悪くも「小泉純一郎」という強烈なカリスマ性のもとに運営されてきた前政権との比較になります。小泉さんは総裁選のときから「自民党をぶっ壊す」をキャッチフレーズに平然と党内に敵を作り、その敵と闘うことで国民から破格の支持を得た。組閣人事においても、派閥関係を考慮せずに「サプライズ」的に一本釣りして、強いリーダーシップの持ち主であることを印象づけることに成功しました。

その後には登場する安倍晋三内閣です。各派閥を通して閣僚を選ぶのか、自分の意志を貫くのか——もしも安倍政権とは名ばかりの、実質は総主流派体制の内閣が誕生するようなことがあれば、

国民の高い期待は、小泉政権との比較を通して容易に失望に変わりますよ。スタートこそが、安倍さんの一番の勝負どころだと思います。

毅然たる人事で指導力を示せるか

櫻井 現時点（九月二十一日）では、組閣の顔ぶれが見られないのですが、内閣の顔である官房長官、外務大臣、経済産業大臣、それから文部科学大臣、党内人事でいえば、安倍政治の理念を体現してくれる、小泉さんにとっての武部さんのような人を幹事長に据えられるかどうか、その辺りが非常に重要になってくると思います。大事なポストにきちんとした保守の価値観をもった政治家を充てていくことができるかどうかです。

遠藤 具体的な名前を挙げるとしたら、どの辺りだと合格点でしょう？

櫻井 そうですね、たとえば外務大臣は麻生さんの留任もいい。彼の場合は官房長官や幹事長候補にも挙がると思いますが……。経産大臣には二階俊博さんは即刻クビにして中川昭一さんに戻すか、あるいは通産大臣時代に中国と渡り合った実績をおもちの平沼さんを党外からリクルートする手もあります。文科大臣には山谷えり子さんなんかいいんじゃないでしょうか。もと、松原さんと同じ民主党の議員でいらっしやいましたが（笑）。

松原 山谷さんはイギリスで成功した教育改革にも詳しく、適役かもしれません。

櫻井 それから大事なのが幹事長ですね。いまの段階では中川

秀直さんの名前も出ていますけれど、中川さんは軍手みたいな方で、右手でも左手でも大丈夫というような確定的なところがありになる。それも政治家の一つの能力でしょうけれど、いざ、という場面で安倍総理の考えに全面的に同調して一緒に走り続けるかどうかとなると、ちょっと違う気がします。

平沼 私は麻生氏とは親しいんですが、派閥の親分であった河野洋平さんに仕えていた姿をみても、彼は自分のボスにあたる人に対しては誠心誠意仕える人間です。小泉さんとも、彼自身の主義主張とは違う部分がずいぶんあったと思いますが、我慢に我慢を重ねて、政調会長から総務大臣、外務大臣とつとめ続けたでしょう、私とは違ってね（笑）。麻生さんと安倍さんとは思想信条の点でもともと非常に近いわけですから、幹事長になれば安倍イズムに忠実に仕える、いいコンビになるんじゃないかと思っていますよ。

遠藤 麻生さんにとって幹事長となれば初めての経験ですから、非常にやりがいのある仕事になると思われませんか。お三方の発言と重複することをあえて申し上げますが、自民党内で圧倒的優位をとって、早い段階から安倍政権が確実視されているということは、ポジとネガのような二つの因果関係があると思うんです。

一つは、安倍さんが総理になることは混迷する現在の日本にとって、必然的な時代の要請であったということ。はたして当選五回、五十二歳になったばかりの安倍さんで大丈夫か、という問題については議論の余地があるとしても、安倍さんご自身がキャッチフレーズに付けておられるように「闘う政治家」であることこ

それが、いまの安倍さんを押し上げているきわめて重要な原動力です。

ところが安倍優位をみて、必ずしも理念・政策を同じくしない人が「下駄の雪」のようにくっついていて、自民党に公明党・創価学会がくっついていてのと同じように、自民党内部にも、結党の原点と相容れない人々がいて、その人たちが便宜主義的に安倍さんにくっついていて……。

平沼 「下駄の雪」とはいい喻えだなあ(笑)。

遠藤 そういう人たちを、ちょっと冷たい言い方をすれば、どう処置していくかが今後の課題でしょうね。「闘う政治家」であるという身上を裏切った瞬間に、安倍さんは並みの政治家になり下がってしまう。安倍晋三でなければならぬ理由を、自分で否定してしまうことになります。ひとたび総理・総裁になった以上、そういう酷薄さを出せるかが問われる。その指導力の有無は当面人事に表れてくると思います。

松原 私は今回の安倍政権は、安倍さんの政権だと思わないんですよ。「権力側からのクーデター」を志向してきた小泉さんのやり方を快く思っていない従来型の人たちがみんな乗っかってきた総主流派政権で、ある意味、旧態依然とした自民党の「先祖がえりのな」政権になるのではないかとみています。

遠藤 しかし、安倍さんの『美しい国へ』には、これまでの政治家の著作とは違ってみずからの国家観や政治観、また一九五五年の自民党結党の原点が明確に語られていて、それを自分が背負うんだというメッセージが示されています。自民党結党のイデオログとは、祖父・岸信介総理以外の何ものでもありません。

岸さんが指導者として素晴らしかったのは、保守合同の理念を政策として明確に示したとともに、その実現にあたって、政略的な牙えを見せたことです。総裁選で石橋湛山に敗れたものの、彼の病気で後継総理に就いた際(昭和三十二年)、挙党体制なんてまやかしたんだと当時の「八個師団」のうち主流派の岸、佐藤、河野、大野派と反主流派の石橋、池田、三木、松村派をはっきり区別して組閣をした(石井派は中間派)。つまり敵・味方を明確に線引きすることで、自前の権力基盤をつくったのです。

ひょっとすると、安倍さんご本人は来年夏の参議院選挙の後、そういうことをする気ではないのかもしれない。ただ、それは大きな間違いで、国民は参院選まで待つてはくれないし、参院選はまさに安倍さんの魅力の是非を国民に問う大衆選挙になります。そこでこれまでのような、自民党内で調整がつけば権力は維持できるといふ幻想の上に立った調和型の人事をした瞬間に、国民からシビアな視線に晒されることになる。

いま「国」のありかたが問われている

櫻井 いま日本に問われている最も大事なことは、へ日本国のありかたです。とくに国際社会の中で、対中国・対韓国関係を軸にして、どういう日本でありたいのか、中国の属国の如き日本であり続けたいのか、それともきちんとした独立国家としての日本をつくっていくのかということが、現在の日本の政治が抱えるプライオリティーの、上から十項目のうち九つを占めるくらい重要だと思います。このことは国内問題においては憲法改正や教育

基本法の改正につながってきます。けれども、やはり一番大事なのは外交政策、つまり日本国の姿というものをいかに外に示していくかでしょう。

松原 国民が安倍さんに注目した最大のきっかけがまさにそれで、北朝鮮の拉致問題でした。九・一七訪朝時や「一時帰国」した蓮池薫さんたちを北朝鮮に返さないと判断を下した際にみせた毅然とした態度が、安倍さんを国民的ヒーローに押し上げた。憲法前文に記されている「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」という一文が世界には通用しないこと、諸国民の公正さに期待するだけでは日本国民の生存と安全が守れないことを国民に理解させましたよね。

憲法改正を含め、国民が安倍さんに求めているのは、従来の日本の政治とはちがう、この毅然たる姿勢への期待感なのです。ところが総裁選での安倍さんの発言や態度をみるかぎり、「自民党をぶっ壊す」とぶち上げて総裁選を闘った小泉さんの非常識すれすれの迫力にくらべて、総理になる前からあまりにも真っ当すぎて、マキャベリズムが少なすぎるような気がします。

遠藤 小泉さんのパワースタイルを安倍さんに求めるのは無理かもしれない。九月一日の広島での記者会見で、「私の政治手法は破壊よりも、なるべく多くの人たちに参加してもらうことです」とはっきり言いましたね。こう宣言したことで、「闘う政治家」であることと、「多くの人を味方につける」ことを両立させることをみずから背負う格好になったのです。いたずらに敵を増やすのではなく、まず味方を増やしてから最小限の敵を徹底的に潰すのが

闘いの本質です。だとすると、安倍さんのポジション自体に矛盾はない。憲法改正にしろ、民主党も味方につけなければ衆参で三分の二の賛成を得られませんからね。むしろみなが不安に思っているのは、往々にして凡庸な指導者というものが、味方を増やすことだけに汲々となりがちなこと、闘うということを忘れてもらうては困る。

自民党は長期単独政権の弊に陥っています。左のほうにまでウイングを広げることで味方を増やし、その過程で保守政党としての結党の精神もどこかに忘れてきた、それが自民党の歴史だった。この点について安倍さんは、五五年の保守合同の二つの理由は、「戦争で疲弊した経済を復興させること」と「日本が本当の意味での独立を取り戻すこと」であり、そこが自分の政治家としての原点だと言明している。さらに日本が一つめの目標を達成した今、後回しになっていた二つめの、真の独立国家としての日本の成立に取り組む意志を旗幟鮮明にしておられる。これは評価できる点だと思いますよ。

櫻井 みんなが安倍さんに鮮烈なデビューを期待していることは確かですが、これから自分が政権を担っていくときというのは、すごくいろんなことを考えるものだろうと思うんです。小泉さんは、総理になる見込みがないと思われていたポジションから、ひょんなことからどんどん上がって総理の座までいきました。「自民党をぶっ壊す」というフレーズにしろ、泡沫候補だから口にできたわけです。でも安倍さんの場合は、泡沫候補どころか「この人で決まり」というところから出発しなければならぬ。メディアの論調を見ても、期待よりも、どこを叩いてやろう

かという構えがありありと見える。そんな状況下で、彼が鮮烈なデビューを狙って、いまから闘志を漲らせていたら、大変な批判の渦のなかに放り込まれ、不要な摩擦が起きて、政権をつくる前からへとへとになってしまいう気もします。

最初からやや老成した感じをみせているのは、彼なりの戦略なのかとも思いますね。靖国参拝の話でも、次期総理の呼び声たかい安倍さんを、保守の人たちはなぜ靖国に行かないんだと疑問に思い、反対派のほうは何とか行かせないようにキャンペーンを張っていた。そこを「四月に参拝していました」と、四カ月たってから明らかにしたでしょう。中国もいまさら拳を振り上げるタイミングでもない……この辺りは見ていて非常に巧みで、意外にしたたかな面があるんだなと思いました。

「闘う総理」としての課題

遠藤 誤解を恐れずに言えば、安倍さんが今後「闘う総理」としてやっていくためには、どうでもいい問題については妥協していい。すべてに「安倍色」を出す必要はまったくないと思うんですね。人事でいえば、先ほど挙げた官房長官、外務大臣、経産大臣、文科大臣、幹事長、それから防衛庁長官も挙げたいと思いますが、そういった人事に安倍さんのカラーをはっきり出す。

それともう一点は、就任直後の秋の例大祭には靖国神社に肅々とお参りすることが大事です。ここを見送ってしまうと、外交交渉のために靖国参拝を見送ったというメッセージを発信することになってしまいます。この二つを就任早々に押さえられるかどうか

かが最低限のポイントで、これさえもできないとなると、松原さんが懸念されるように、国民の期待というものが失望に変わってしまいかねない危険性があります。

松原 そうはいっても小泉さんが猛烈な派閥の反発の中、一人でやりとげたような一本釣りの人事ができなければ、リーダーシップの点で、国民に対して小泉さんのほうが強烈だったという印象になると思うんですよ。そこで平沼先生くらいの長老格で、安倍のことは俺が守る、という方が自民党内にいれば迫力も凄みも出てくるでしょうが、実際のところはどうか。

平沼 小泉さんがこれまでの慣習を打破して、あれだけの独断専行ができた背景には小選挙区制と政党助成金、この二つが大きな要因としてあります。国民の皆さん方が一人あたりコーヒ一杯分、二百五十円出すということは、三百億円以上になりますね。それを不要だといって拒否している共産党をのぞく政党で頭割りして配分される。そこにもってきて、小選挙区の公認権を執行部が持つわけでしょう。私は今年の総選挙で公認をはずされた側ですが、執行部の権限は強くなるばかりです。こういった画期的な政治環境の大変化がなければ、小泉さんも「刺客」を投入するところまではできなかったと思いますよ。

松原 ああいう強烈な排除の論理を、日本人は好まないようにいて案外好むところがありますね。

平沼 安倍さんも総理になれば、小泉さんと同じ権力を持ちうるわけですから、靖国参拝、憲法、教育基本法改正など、保守の理念を実行すべきときには断固としてそれを発揮していただきたいです。組閣人事にはその意味でも勇断が求められる。

遠藤 ただ、小泉さんの人事はあまりに個性的でしたからね。

平沼さんはよくご存知のエピソードだと思いますが、田中真紀子外相任命のとき、小泉さんが福田（康夫）さん、安倍さん、秘書官の飯島さんに意見を聞いて、三人三様に反対をしたところ、小泉さんは「うん、わかった」と言って、その場で電話をかけて田中さんに就任を要請したという。なるほど、これが小泉人事か、と妙に納得させられました（笑）。

一方安倍さんは、官房副長官の時代からバランスを重視する森喜朗さんの魅力と、変人・小泉さんの魅力を並列して語れる自分に存在理由を設定しておられた人ですし、それはさっきの広島での発言でも裏打ちされている。となれば、小泉さんのドラスティックな打ち出し方ではなく、ポイントをどう押さえてくるかということで判断するしかない。

櫻井 日本の政治家の中で小泉さんのようなスタイルをとり得る人は、田中真紀子さんが総理大臣になったとき以外には、おそらくいないんじゃないですか。

平沼 そうでしょうねえ。

櫻井 日本の文化の中にある行動パターンと決定能力ですからね。それを安倍晋三さんに求めること自体が違ふだろうと思うんです。ここにいてる四人を見ても、それができそうなのは遠藤さんぐらいですよ。

遠藤 ぼくはきわめて「日本的」ですよ（笑）。

松原 いや、櫻井さんならできます（笑）。

櫻井 安倍さんについて希望を持ちたいのは、『美しい国へ』の中にもあるように、岸信介の孫として、家の周りを「安保ハン

ターイ」とデモ隊に取り囲まれたときに、お祖父さんがどういふふうにしていたかを幼な心に見て、鮮明に記憶に残している。安保条約が成立する前日には三十三万人のデモ隊が出て、官邸に閉じ込められた岸さんが弟の榮作さんと「わたしは、けっして間違っていない。殺されるなら本望だ」と死をも覚悟したという逸話も残っていますが、これは凄まじい体験です。

政治家は信ずることのためには孤立し、死をも覚悟することがある、という尋常ならざる体験があの一家庭では、家族の会話としてたびたび語られてきたはずなんです。そういった空気を肌身で知っている人ならば、いざというときの踏ん張りは他の政治家よりぬきんでているだろうと思う。よく、いろいろな人がその外見から判断して、安倍晋三氏は甘いお坊ちゃまだというような評価をしますが、私はそうではないと思います。

拉致問題解決のために最初に北朝鮮に行った二〇〇二年九月、国民の熱烈な思いを受けて平壤に入り、五人生存、八人は死亡していますと言われて、すでに共同宣言の文言まで全部できているという状況下で、安倍さんは「北朝鮮が謝罪しないのであれば、このまま帰りましょう」と盗聴されていることを知りながら、小泉さんに直言しましたね。私はあの平壤宣言そのものにはきわめて不満で、なぜあれに署名して帰ってきたのかと思っていますが、安倍さんの政治家としての瞬時の判断の方向性は正しかったという評価をしたい。今よりもずっと経験という点では未成熟だったあの頃にできたわけですから、これからはその判断力をさらに鋭く強く、深くしていけばいい話だと思います。

平沼 私もかつては福田派にいて、安倍（晋太郎）派、三塚派

とつづく中で、ずっと安倍晋三という若い政治家を間近に見てきましたし、交流も深かったんですね。彼は父・晋太郎さんのDNAよりも、お祖父さんである岸信介のDNAをより色濃く受け継いでいると観察しています。ある意味、非常に剛直なところがあつたように、岸信介のDNAをもっと磨いて、毅然として国政を担っていけば、国民の期待に充分に応えられると思っています。

国家戦略をもって国民の財産と生命を守れ

平沼　ところで、来年七月の参議院選挙は、政局の天下分け目になるでしょう。自公が十五議席失うと、保革逆転になってしまいます。小沢さんはこの機会を虎視眈々と狙っているし、国民新党の亀井（静香）さんあたりも小沢さんと連携しながら一人区をまず崩していった、新しい政局に作り変えよう、かつての連立内閣、村山内閣や細川内閣が誕生したときのような形で、政権のキヤスティングボードを握ろうという戦略です。

来年の夏までに、国民が期待するものを安倍さんが出せない場合には、自公はかならず敗れると思いますね。そうなれば安倍政権も短命に終わる可能性もあります。それで私なんかは、いま自民党にも民主党にもモテモテでございまして……（笑）。

松原　郵政の問題では、民営化反対と言っていた多くの国会議員が小泉さんの猛威の前に最後は黙ってしまった中で、平沼先生は平然と最後まで頑張られました。こういう毅然たる態度をだれも見逃しませんよ。国民の安倍さんへの期待とは、具体的にいえば外交や拉致問題、憲法改正と教育基本法改正のほかにもう一

つ、経済的な側面がポイントになると思うんです。

小泉政権下で竹中平蔵さんが改革と称してやったことは、日本の国の財産を海外のハゲタカファンドに切り売りして、彼らの傘下に収めるという売国奴的所業に他ならなかった。リップルウツドに長銀を売った話はその最たるものでしょう。瑕疵担保付で国民の血税八兆円を注ぎ込んだあげくにたった十億円で売却し、新生銀行を上場した相手に二千億円以上もぼろ儲けさせたんですからね。あれを踏襲されてはたまらないと日本の財界は安倍さんの動向を注視していますよ。日本の財産を海外資本からしっかり守ることも、個人の生命、財産を守るのと同様に、日本が国家として自立する上で重要な要素であるはずですよ。

遠藤　独立国家として政治的にも経済的にも自立している国であれば、そもそもハゲタカファンドの草刈り場になるはずがない。その当たり前のところに日本の政治が戦後、一度として立てこなかったということが問題なのです。特に六〇年安保に疲れて岸内閣が退陣してからというものは、池田勇人首相がド・ゴールに「トランジスタラジオのセールスマン」と揶揄されたように、日本は国家を挙げて、安全保障はアメリカにオンブシ、経済だけやっていけばいいという国に成り下がったのですよ。竹中さんの政策に問題がないとは言わないけれども、こんなものは「結果」にすぎない。国家としてはなはだいびつな状態が連綿と続いてき、これが問題の本質なんです。拉致されたのも、ハゲタカファンドに狙われたのも、日本に国家としての主体がなかったことに根本的な原因がある。

平沼　昭和二十七年四月二十八日にサンフランシスコ講和条約が発効して独立を回復したあと、国家の主権をしっかりと守る体制

PHPの本

中西輝政

編著

定価1575円

「日本核武装」の論点

国家存立の危機を生き抜く道

中西輝政、日下公人、平松茂雄、櫻井よしこ、西岡力、伊藤貫、兵頭二十八の各氏による、書き下ろしを含む論考・鼎談を収録。

高山正之

定価1260円

歪曲報道

巨大メディアの「騙しの手口」

朝日新聞、NHK、TBS……。全国に浸透している巨大メディアの「歪曲」ニュースを、気鋭の名物コラムニストが一挙に暴く！

PHP研究所

(102-8331) 東京都千代田区三番町3番地10 定価は税込
電話 (03) 3239-6233

をとるべきだったんです。戦後の政治のほとんどを担った吉田茂さんが、日本は自分のあいだ商人国家でいけばいいと言ったり、椎名悦三郎外相が国会答弁で国防はアメリカという番犬様にお任せしていいんだと言ってみたり……こういう政府の態度が経済分野のみならず、現在まで尾を引いている領土問題にも絡んでいます。

たとえば竹島は、史実に照らしてみても日本固有の領土に決まっているんです。一六一八年の日本の記録にも、回船問屋の大谷某と村川某が鬱陵島にはいい鮑とアザラシがとれるからと当時の伯耆国に狩猟許可をもらい、その中継地が当時の松島（現在の竹島）だちゃんと残っている。さらに元禄九年に、李王朝が交渉を持ちかけてきて、江戸幕府が鬱陵島は朝鮮に譲りましょうと言ったと。しかし松島はそのままになっていたのです。それを戦後、講和条約直前の年明けに李承晩が勝手に「李承晩ライン」を引いたものだから、英国も中華民国も日本もそれに抗議して、国際司法裁判所に持ち込もうとなったときに、韓国のほうが拒否したわけです。自分たちが全く不利だから。

おっしゃる通りほんとうに、独立国としてやるべきことを全然

やらずに、自国の生存と安全を他国に委ねてきてしまいました。さきほど憲法前文の話があがっていましたが、古今東西、世界の歴史を繙いてみても、自国の利益を愛するエゴと横暴はあっても、他国の公正と信義を信頼して自国の生存と安全を保持しようなんて考えはありません。

櫻井 つまり戦後の日本は「まったき形」の国家ではなかったということですね。松原さんがおっしゃった、日本国民の財産を外国に渡して何のための改革か、ということはみんなが感じていることです。天然ガスを買うにしても、他の国は国家プロジェクトとしてやっているのに、日本だけが各商社がてんでんばらばらに買い付けているのが現状です。経済という利害得失がもつとも顕著な分野で、国家戦略もなしに、日本人はよくそこまできやってきたと思います。

松原 日本の経済文化というのは日本独自の文化の中で支えられています。「べったり貸し」なんていいいますが、日本の中小企業は自己資本が非常に乏しく、儲けのほとんどを税金でもっていかれる中、銀行からの長期借入れを自己資本のようにして回ってきました。これが西洋流にみれば借入金が大きすぎると破綻懸

念先に挙げられてしまう。これでは日本文化の否定です。

ひるがえって考えれば、アメリカはアメリカ国内の経済文化を世界の経済基準にしてしまったわけです。じゃあ、日本の政治が日本の経済文化を、全部とはいわないまでもせめて世界の経済文化の一部にしようと努力してきたのか。企業を一切助けることもせずに、海外資本の思惑にうかうかと乗って言われるがままに国の財産を差し出すというのは、最低限の財産防衛努力すら怠ってきたということでしょう。酷い話ですよ。

櫻井 いま、あらゆる分野で日本人全体が、「やっぱり国家は必要なんだ」と、ようやく認識しかけているんだと思います。拉致問題が典型例ですが経済活動においても、日本だけがどうして経済界を守れないのか、アメリカだってヨーロッパだって、中国なんて政治と一体となって盛り上げているじゃないかと、国家を取り戻そうという機運が自然と生まれてきています。それに安倍さんがどこまで応えられるかが腕の見せどころでしょうね。情報省をつくって国家戦略を持たなければという考えも打ち出していますが……。

平沼 情報収集に一つの専門セクションを設けようというのはいいことだと思いますね。官房機密費はいままで訳のわからない使われ方をしてきて、外務省の各公館のワインセラーのワインに化けたりしていたわけですから、もっと国家の利益に役立てるために有効に使うべきです。

日露戦争のころのほうがよくほど情報収集の意識があって、商社もバルチック艦隊の動向を逐一、日本政府に知らせてきていたようですね。そういう情報収集の連携プレーがちゃんとあった。一

方、政府も明石元二郎大佐に代表されるように、国家歳入二億五千万という貧乏国でありながら、百万円という目の飛び出るような大金を持たせて情報収集、謀略工作を行わせていました。任務を終えて帰国した明石大佐の秘密裡の収支報告書には、全部明細がきちんとあったそうです。侍精神が生きていた時代の、誇り高き日本人の逸話ですけれどね。

松原 いまや岐阜県庁が収支を合わせるために、裏金を燃やしていますからね(笑)。

櫻井 政治家や財界人にしても、中国に行って日本の国家意志をきちんと伝えるどころか、向こうで平身低頭して中国の意向をうけたまわって、帰国してから「靖国には行ってくれな」と触れ回って歩いているのですからね。そういう人たちも日本の国の本体が国家たらんとする努力を始めれば、少なからず歩調を合わせてくると思いますし、またそうしなければ日本企業が生き残っていけないような状況に変わっていくでしょう。

遠藤 岸さんが石橋内閣で外務大臣になったとき、「外交五原則」を出しました。①自由主義国としての立場の堅持、②対米外交の強化(後に「合理化」、③経済外交の推進、そして次が重要なのですが、④国内政治に根ざす外交、そして⑤貿易中心の対中外交、と。つまり自由主義経済を推進するけれども、日本独自の守るべき価値は外交に優先させると、明確に述べているわけです。さらに対中関係は経済だけと割り切っている。この大筋さえ、岸信介の遺伝子の継承者として安倍さんが踏まえることができれば、外国のハゲタカファンドの草刈り場になって、好餌とされている今日の状況もおのずと軌道修正できるし、対中外交もう

まくいく。中国との関係は「政冷経熱」でいい。余計なところに踏み込む必要はないのです。

民主党が政権交代をめざすなら……

櫻井 自党内は安部さんがうまくリーダーシップを発揮すればまとまっていくと思われませんが、日本は民主国家なのですから野党対策も大事でしょう。このごろの小沢さんは対立軸を出そうとするあまりに、あえて安倍政権に反対の立場を演出しているように見えますね。国内政治では消費税であれ年金問題であれ、大いに論戦を展開していると思いますが、国家の基本に関わる対外政策においては、民主党もある程度までは、自民党と共通の基盤を持って協力しなければならぬ時期にきているのではないですか。アメリカの民主党と共和党が基本的な外交政策では手を携えるように。

遠藤 私は、左からの圧力というのは無意味だと思うんです。戦後の政治史を眺めると、日本の政治の大きな変革はつねに右、保守側からの問題提起と運動によって行われてきています。

昭和三十年の保守合同がそうだし、昭和三十五年に安保騒擾で岸内閣が退陣したときでさえ、暴力的な安保反対闘争を批判した右派系が社会党から分かれ、非自民ではあるけれど反共産主義と国防の重要性を明確にした国民民主党としての民社党を結成した。安保反対、とあれだけ左翼知識人とマスコミが大騒ぎしたにもかかわらず、この年の秋の総選挙で自民党は三百議席弱を獲得して圧勝しました。大きな変革はつねに保守的な民意に支えられてい

るということです。

平成五、六年の細川内閣がなぜ駄目だったか——それは国民から最もノーという刻印を突きつけられた社会党が連立政権に六人もの閣僚を出した。こんな政権が不安定になるのは当たり前です。あの政変については、自民党が下野したことはかりが取沙汰されますが、自民党は選挙で一議席増やしている。つまり、左翼が徹底的に凋落して、保守・中道のシェアが圧倒的に広がったのです。

小泉さんにしたって、破壊するといいいながら同時に、保守無党派層の人たちを取り込んで、政局の節目節目でおいしい果実を食べてきています。ですから、民主党が真剣に政権を狙おうとするならば、左からの圧力を安倍政権にかけている限り、絶対に政権はとれない。

櫻井 逆説的な言い方になりますが、民主党は前回の選挙に負けたことで危機を逃れました。党内の左翼勢力が激減したでしょう？ 小沢さんは左シフトで対立軸をつくるのではなく、保守のシフトで安倍さんと戦うスタンスをとったほうがよっぽどいいと思います。民主党の中でさえ少数派で、政界全体ではさらに少数派の旧社会党系の人々に、いま近寄っていくのは、潮流を逆に泳ごうとするような戦術ですね。

そのあたり、松原さんはいかがお考えですか。

松原 民主党は生まれたばかりの党で、様々な考え方がお互いに消化されきっていないとも言えますが……ただ、政党は進化するものだと思うんですよ。自民党は小泉さんという特異な人材を得てかなり進化しました。拉致問題をターニングポイントとし

て、いま国民の意識は、集団的自衛権容認の問題、憲法・教育基本法改正等々、いずれも「是」に向かっています。となれば、現実を考えたとき、民主党としてもそちらのほうに行かざるをえない。小沢さんも党首として、この流れのほうに国民に強くアピールできることは心得ていますよ。

平沼 最近には民主党さんとよくお付き合いさせていただいていますが、教育基本法の問題では、政府与党の出した改正案は公明党という手かせ足かせのために、非常に中途半端なものでした。改正の根幹となるべき愛国心の記述ですら譲歩してしまっていた。「我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度」と。ところが民主党が出してきた新法を見てびっくりしたのは、前文に「日本を愛する心」の涵養を明確に盛り込んでいるし、人間というのは一度生まれてきてやがて必ず死ぬ、という死生観を教育で教えるべきだと、これはまさに「保守の心」だと感心しました。

私も二大政党はいいシステムだと思いますが、かつての自民党と社会党のように国の基幹的な問題で相反する立場に立つもの同士では絶対によくない。基幹的には共通項があるけれども方法論が違うというような二大政党が理想的ですから、教育基本法でも憲法改正でも、改正を是とするならばともに切磋琢磨していけるんじゃないでしょうか。民主党もいってみればいろんなところから集まってきているわけですし、小沢さんだって元自民党、松原さんご自身も元は自民党の国会議員でもいらした（笑）。遠藤さんのおっしゃるように右のバネを使ってやっていたら、いい意味での二大政党が生まれてくる可能性がある。そのきっかけになる

のが、来年の参議院選挙ごろかと私はみています。

戦後的対立軸からの脱皮

松原 今回の改正案を民主党が出した最初のいきさつは、数年前に教育基本法には愛国心をもちこむべきだ、と考えを同じくする自民党の有志と、われわれ民主党有志との間で会合を開いたのが始まりでした。自公の与党協議はその後始まったんですね。教育基本法を改正する必要があるという立場の人は、民主党にも自民党にも公明党にもたくさんいますから、こういった自民・民主の有志連合のイニシアティブがなかったら、教育基本法の改正論議はここまで盛り上がっていなかったかもしれない。

それと、民主党が政権交代をめざす党として頑張る上でもうひとつ大問題なのが、マスコミ対策としての対立軸をどうするかです。自民党と比べると、圧倒的に報道量が違いますし、実際に「安倍さんに対抗する対立軸がないと、あんた等の存在感はないよ」というスタンスのジャーナリストが多くて、結局そういう空気が、民主党を従来型の野党たらしめているところもあるので

遠藤 そういう戦後的対立軸から抜け落ちてきた論点を、一体だれが最初に、説得力をもって提示するかに次の展開はかかっているんですがねえ。

松原 ただ、今の時代はテレビやネット、メディアが世論にかなりの影響を与えるのは周知の事実ですからねえ。選挙前ともなればとくに……。ですから、小沢さんが対立軸をつくる理由は、

二大政党論に基づくダイナミズムを意識して、対立軸をつくらなければ、マスメディアが民主党を埋没させてしまうという懸念があるからだと思います。マニフェスト合戦もそうした事態への対抗策として、民主党から仕掛けた面もあったかと。

櫻井 それならば、民主党が一つ打ち出していると思う争点がある、公明党のことです。小沢さんも公明党とは組まないと言っているわけですし、政教分離という政治理念に対して明らかに論議に値する状況があるのですから、公明党と創価学会とはどういう関係にあるのか、そのことを憲法に照らし合わせればどうなるのか、偏見なしに一度国会で議論をしましょうという筋を一本立てるだけで、民主党のインパクトはずいぶん強くなるだろうと思うんですね。ある選挙区においては逆風になるかもしれないけれども、多くの人が「どうして誰も言わないのか」と、疑問に思っていることです。これは大変な注目を浴びると思いますよ。

平沼 国民新党が面白いことを言っていましたね。憲法改正も教育基本法改正もしなければいかんと思っっているけれども、自公が共同でつくった案には絶対反対だということなんです。

松原 それはまたどうして？

平沼 公明党と一緒につくったのではろくなものにならないということなんです（笑）。だから、自民党とわれわれ保守系無所属と松原さんを初めとする民主党有志で新しい流れをつくって、戦後積み残してきた課題を一气呵成にやるというのも、非常に大切なことだと思うなあ。

松原 おっしゃる通り、様々な可能性は排除できないと思いますね。

櫻井 自公の政策協議のなかに憲法改正が盛り込まれないことになる見込みとか、集団的自衛権については何も書かないといった報道が散見されます。ここにも公明党の存在が影を落とす形が入っていて、これは日本人全員にとって、また公明党支持者にとっても不幸なことです。本来彼らがめざすべき平和や人道問題に特化できずに、集団的自衛権について文句も言えないというのはね。安倍さんに多少の懸念をもつとしたら、こういう状況を調整しようという考えをもったら、即マイナスの効果に直面するということなんです。

遠藤 私は小沢さんが「自分が首相になったら靖国参拝する」と舵を切り換えたら、爆発的に支持が増えると思いますよ。保守系無党派票をかなり獲得できます。これは断言してもいい。

櫻井 私もそう思います。小沢さんが靖国批判を展開して、A級戦犯を合祀するのはけしからん、もってのほかだという類のことをおっしゃいましたね。あれで民主党に対する国民の信頼はすごく揺らいだに違いないと感じています。

松原 小沢さんは別のところでは、外国からとやかく言われる問題ではないと言っているんですよ。私も八月十五日には参拝していますが……。

櫻井 それはいいことですね。私は松原さんを初めとして、民主党の若手にはいい人が揃っていると思う。日ごろから感心しているんですが、党首である小沢さんが靖国参拝を批判し、「日・米・中は正三角形の関係だ」と加藤紘一さんと近いようなことをおっしゃる。このようなスタンスをとるかぎり、政権交代をしてもらっては困ると言わざるをえません。

靖国に関して、自民党と反対の立場をとって、「行きません」と宣言することが世論の支持を得ることにつながると考えているとしたら、それは逆です。もしそのあたりの読み違いがあるのなら、松原さんたち若手議員が、「国益と照らして、ここらで方向転換していきましょう」と党内議論をなさったほうがいいと思います。

松原 その点は党内論議を高めていきたいと思っています。

独立国家として真の幕開けを

遠藤 結局、安倍さんにも同じことが言われているんだろうと思いますね。

櫻井 全く同じ構造ですね。

遠藤 あえて損得勘定を申せば、昭和六十年八月十五日に中曽根さんが内閣総理大臣として公式参拝して、翌年七月の衆参同日選挙で大勝しましたが、その一ヵ月後の八月十五日に中国の批判に屈して参拝をやめてしまった。その次の参議院選挙はいわゆる「消費税選挙」でしたが、売上税問題で前言を翻したことで、国民が了とした靖国の公式参拝をこっそりやめてしまったことが、ボディーブローのように効いて、あの選挙に負けたのだと私は見えています。

平沼 なるほどね。

遠藤 小泉さんも平成十三年に、「八月十五日に参拝します」と大見得を切って、わずか四ヵ月後には十三日に前倒し参拝をしました。その直前の参院選では大勝利だったのが、平成十五年の

総選挙と十六年の参議院選挙では苦戦を強いられた。要するに、保守の理念に反して前言を翻すようなことをすると、国民はしっぺ返しをするんです。

櫻井 小泉さんの外交政策でただ一つ評価されるのは、最後の八月十五日に靖国に参拝したということだけですからね。あれがなければ惨憺たる結果でした。

遠藤 あの八月十五日の参拝を受けての各社の世論調査を見ると、参拝支持と不支持は拮抗しているといわれているけれども、各社の世論調査の数字を平均すると七ポイント強の差で支持のほうが多い。内閣の支持率も八ポイント上がりしましたし。

松原 それは単純なことで、参拝自体の是非より、中国や韓国に言われっぱなしではないということが国民に評価されたんでしょう。

遠藤 そう、だから、民主党はもし政権を狙うつもりならば、世論というものを真面目に受け止めるべきだという話です。

松原 自然発生的なナショナリズムの機運が起こっているなかで、世論の動向が現実的に政権をにぎる鍵であることは、小沢党首も一番よく理解していますよ。

平沼 安倍さんの使命は、独立国家としてのほんとうの幕開けをあらゆる分野で果敢実行していくことでしょうね。その期待を裏切れば、参院選には負けて、短命政権になってしまう。

櫻井 そうならないためにも例大祭に堂々とおまいりなさることです。今年の秋と来年の春の二回ありますから。

平沼 それが参議院選挙での自民党の勝利につながるし、独立国としての幕開けにもなるということですね。